

和泉式部歌の〈雪〉

——消えゆく命の象徴として——

芝
紗耶香

はじめに

冬は、寒く厳しい季節である。花のみならず草木の緑さえ枯れ果てて、生命は皆静まり返る。心動かされる景物の乏しい季節であつて、詠歌の対象とならなかつたことも納得できる。『古今和歌集』（以下、『古今集』）における四季の部立て別歌数から、その意識ははっきり見て取れ、景物に富む春・秋の歌数と比較すると実にその四分の一以下の歌しか冬の部には所収されていない。^①

しかし、冬の景物として、圧倒的に歌材としての存在を誇るのが〈雪〉である。それは『後拾遺和歌集』までの勅撰集の冬の部における雪の歌の占める割合に明らかである。（ ）内に、冬の部における雪の歌の割合を示した。

古今集 冬歌 314 ～ 342 二十九首中 雪詠二十三首（七九・三％）

後撰集 冬歌 443 ～ 506 六十四首中 雪詠二十七首（四二・二％）

拾遺集 冬歌 215 ～ 262 四十八首中 雪詠二十首（四一・七％）
 後拾遺集 冬歌 377 ～ 424 四十八首中 雪詠二十首（四一・七％）

『古今集』では、冬の部の八割近くが雪詠で占められており、冬の景物として最も定着した歌材であったことがわかる。時代が下ると、徐々に雪以外の景物にも焦点があてられるようになり、雪の歌の割合は減少してゆくのであるが、『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』共に冬の部において四割以上の歌数を保っているところを見れば、やはりその存在は揺るぎないものであると言えよう。

本稿では、この四代の勅撰集と、『古今和歌六帖』、及び同時代の一部の歌人の家集^②における〈雪〉の歌を和泉式部の歌と比較することで、彼女の歌を見てゆきたいと考える。

一

四代の勅撰集における雪の歌を見てゆくと、実に様々な詠み方をされていることがわかる。枯れ木に積もる雪を花に見立てた歌などは、最も典型的な〈雪〉歌のパターンだと言えるだろう。時代が下るにつれて、その表現にも広がりが見られることは当然であるが、ここでは、〈雪〉歌の一つのパターンとして認められる〈老い〉を詠む歌に着目したい。『古今集』では、雪が「降る」ことに我が身が「古る」びていくことを掛けた次の一首が見出せる。

年のはてによめる

〔1〕 あらたまの年のをはりになるほどに雪もわが身もふりまさりつつ

（古今 339・巻第六・冬・在原元方）

「ふりまさ」るのは、「雪もわが身も」と詠ずるところから、「ふり」には、「雪が」降り「わが身が」古り」の意が掛けられていることがわかる。ここでは、「雪」と「老い」は、両者に共通する「ふる」という語を通して重ねられているが、『後撰集』に見られる次の贈答歌では、雪の白色を白髪に準えて、視覚的に「老い」を表現していることが窺える。

雪の朝、老を嘆きて

② 降りそめて友待つ雪はむばたまの我が黒髪の変るなりけり

(後撰471・卷第八・冬・紀貫之)

返し

③ 黒髪の色ふりかかるとのうき見れば友鏡をもつらしとぞ思ふ

(後撰472・卷第八・冬・兼輔朝臣)

又

④ 黒髪と雪との中のうき見れば友鏡をもつらしとぞ思ふ

(後撰473・卷第八・冬・紀貫之)

返し

⑤ 年ごとに白髪の数をます鏡見るにぞ雪の友は知りける

(後撰474・卷第八・冬・兼輔朝臣)

一首の内に黒髪の「黒」と、白髪の色に準えた雪の「白」を同時に詠むことで色の対比を描き、黒から白へ変化する髪をイメージさせて老いを強調する。四首全てにわたって、「雪」は白髪を表すものとして詠まれている。

このように雪の白を白髪の色に準えて「老い」を詠む歌は定着していたようで、『古今和歌六帖』にも同類の歌が見られる。「天」の部「雪」に所収される一首である。

⑥ くらかみのしろくなりゆく身にしあればまづ初雪を哀とぞ思ふ

(六帖708)

7 とし月のすぎゆきくれば草も木もおいこそすらししろく見ゆれば (六帖 761)

白くなってゆく髪の色と雪の色が重ね合わされ、雪を見ることで自身の老いを感じているのであろう。それ故、雪に対して「哀れ」の感情が湧き起こる。雪が自身の白髪を表す⑥の歌とは異なり、⑦の一首では白くなることを老いることと捉え、雪の降り積もった草木を「老いた」と擬人化して捉える。この表現は次に挙げる⑧の歌にも共通する。雪の降り積もった山を「老いた山」と表現するのである。

題知らず

8 年経れば越の白山老いにけり多くの冬の雪積もりつ、 (拾遺 249・巻第四・冬・壬生忠見)

百首歌の中に

9 ゆき積もる己が年をば知らずして春をば明日と聞くぞうれしき (拾遺 262・巻第四・冬・源重之)

⑧でもう一つ見ておきたいのは、結句の「雪積もりつ、」である。①の一首は、「ふる」の語に「(雪が)降る」と「(身が)古る」を掛けていたが、ここでは、「雪が積もる」ことに「年が積もる」ことを重ねているのだ。「白」という外面上の〈老い〉と、年月の経過による〈老い〉を詠み重ねている。それは続けて挙げた⑨の歌でも同様で、「積もる」は「ゆき積もる」と、「積もる己が年」の両方に掛かっていると言えよう。この表現は、その後の歌集でもしばしば見られる。雪に老いを重ねて詠む歌の一つの表現として確立していることが知られる。

ゆきふりてはべりけるあしたむすめのもとにおくりはべりける

10 ふる雪は年とともにぞ積もりけるいづれか高くなりまさるらむ (後拾遺 417・巻第六・冬・藤原公任)

後三条院東宮とまうしける時殿上にて人人としのくれぬるよしをよみ侍けるに

⑪ しろたへにかしらの髪はなりにけりわが身にどしのゆきつもりつつ (後拾遺423・巻第六・冬・藤原明衡朝臣)

また、同時代の歌人の家集中には、雪の白色に白髪のを準えた上に、修辞を重ねて老いを詠む歌が見られた。

⑫ 年ふればうばのたまも老いにけりからすの髪に雪つもりつつ (好忠集359)

⑬ けぶりして年ふりぬるとこしの山雪とも見えぬみねの白雪 (相模集480)

右に挙げた好忠の一首(⑫)は、「からすのかみ」が黒髪を表しており、それに雪が積もる、と詠むことで白髪を想起させる詠となっている。積もる雪は積もる年を含み、更に初句の「年ふれば」には雪の縁語の「降る」と、古びていく意味の「古る」も同時に掛けられている。一首の内いくつもの修辞を重ねて〈老い〉を詠んでいることがわかる。また、続けて挙げた相模の一首(⑬)では、年老いた山であるが、白い雪の積もっている様子はとも白髪には見えないう、と、雪山の美しさを詠っている。雪が降ることに身が「古る」びること、年月が「経る」ことを掛けているのである。

以上に見てきたように、〈雪〉は〈老い〉を重ね合わせて詠まれるものであった。雪が「降る」ことに「(身が)古る」を掛けた歌をはじめとして、白い雪を白髪に準えて、視覚で〈老い〉を彷彿させるのに加え、修辞に焦点をあてて雪が「降る」ことに年が「経る」、「雪が積もる」ことに「年が積もる」ことを重ねて老いを嘆く歌が見られたことを確認した。しかし、和泉の雪の歌には〈老い〉を詠む歌は存在しない。彼女は〈老い〉を一足飛びに越えて、〈死〉を詠うのである。

前節では、雪に老いを重ねて詠む歌を確認してきたが、和泉式部歌においては、その意識は薄く、老いを越えて死を彷彿させる素材として〈雪〉が詠まれている。

内侍のうせたる頃、雪の降りて消えぬれば

〔A〕 などで君むなしき空に消えにけん淡雪だにもふればふる世に (和泉集482)

〔B〕 君をまたかく見てしがなは、かなくて、去年は消えにし雪も降るめり (和泉集947)

夜一夜、病み明かしたるつとめて

〔C〕 すべなくて消えぬることよとばかりも雪の朝に誰眺めまし (和泉集1214)

〔A〕は、いずれも「雪より儂い命」を詠んだ歌である。〔A〕は、淡雪でさえ降ればしばらく消えずにあるものなのに、「君はそれよりも早く消えて（死んで）しまったと嘆く。最愛の娘の死に際しての詠歌である。〔B〕は、いわゆる「帥宮挽歌群」^③に属する一首である。去年消えた雪は今年また降っているのに、消えた「君」は甦らない。甦った雪の様に、君にもう一度逢いたいと嘆く一首。消えやすい雪よりも尚儂いのは人の命であり、雪のように繰り返すものではなく、一回的なものとして詠まれている。〔C〕は、自分自身が死を間近に感じた上での一首である。私が死んでも「雪のように儂く消えてしまった」と、雪を眺めて私を思ってくれる人などいようか、そのように眺めてくれる人など誰も居はしない、と詠う。「夜一夜、病み明かしたるつとめて」の詞書からは、心細い病床の一夜を過ごしたことが窺い知れる。雪と同じように儂い己の命と、誰にも思われることのない我が身の孤独を見つめている。

和泉の歌が、全て〈死〉を間近に実感した上での詠であることは明らかである。また、三首それぞれに示される「むなしき」「はかなくて」「すべなくて」という語からは、雪が溶けることは儂く、人の命と重ね合わされるものであったという捉え方が見て取れる。しかし、実はこのような捉え方は非常に珍しく、他の歌集の中にこのような歌はほとんど見出せない。

というのも、従来、雪が溶けることは春の兆しであり、喜びであると捉えられてきたためである。

14 降る雪はかつぞ消ぬらしあしひきの山のたきつ瀬音まさるなり (古今319・巻第六・冬・よみ人知らず)

15 したぎえの雪まを見れば冬ながら春のけぢかき心ちこそすれ (六帖71)

正月

16 かが野にむらぎえのこる雪よりもわかなつまむといふ人ぞなき (重之女集92)

二月

17 雪どけの水にもきえずかすみつもゆるやのべのわかななるらん (重之女集93)

18 人よりもわきてうれしきいづみかなゆきげの水のまさるなるべし (赤染衛門集329)

右に挙げた歌からは、雪が溶けて流水音が響き、躍動感に溢れた様子(14)や、解けた雪の下から若菜が覗いて生命力に満ちた様子(16)(17)が感じられる。消えかかると雪は春が近いことを感じさせるものであり(15)、雪消の水が増すこととは「うれしき」ことのひとつである(18)と捉えられる。

雪の溶けることを喜びと捉える意識は恋歌においても確認できる。

定文が家の歌合に

19 霜の上に降る初雪の朝氷とけずも物を思ふ頃哉 (拾遺229・巻第四・冬・よみ人知らず／六帖696)

女を語らひ侍りけるが、年ごろになり侍にけれど、うとく侍ければ、雪の降りたるに

20 降るほどもはかなく見ゆるあは雪のうらやましくもうちとくる哉 (拾遺244・巻第四・冬・清原元輔)

ここでは、溶ける雪は「打ち解ける心」「男女の打ち解ける仲」に重ね合わされている。19では雪が凍って溶けない、と詠み、打ち解けない心を嘆いており、20では降るやいなや溶けてしまう雪となかなか打ち解けない女との仲を比べて雪はうらやましいものだとして眺めている。「とける」ことへの期待が含まれていると言えよう。それはやはり、春の兆しである雪解けが喜びの対象として意識される故であろう。

しかし一方で、雪の溶けることが如何なる時も喜びと捉えられているわけではないことも窺える。

雪の少し降る日、女につかはしける

21 かつ消えて空に乱る、泡雪の物思ふ人の心なりけり (後撰479・巻第八・冬・藤原かげもと)

22 降る雪に物思ふ我が身劣らめや積もりくして消えぬ許ぞ (後撰495・巻第八・冬・よみ人知らず)

23 大空にふるしら雪のつちにおちばけぬべき恋もわれはするかな (六帖688)

24 きえつつも猶ふる物は人こふる我がたましひと雪となりけり (六帖692)

25 空にしる人はあらじなしら雪のきえて物思ふわがころとは (六帖695)

21では、一方で消え、一方で飛び乱れる雪に、消え入る思いと乱れる思いを重ねている。続けて挙げた22では、深々と降り積もる雪に積もる思いを重ねており、雪は消えるが思いは消えない、と詠んでいる。また、『古今和歌六帖』の三

首(23 24 25)に「消えても思う心」が詠まれていることから窺えるように、「消える恋」「消える思い」は報われな
い相手への恋心を指しているため、雪解けに男女の打ち解ける仲を準えていた歌ら(19 20)に見えた、溶ける(解ける)
ことへの喜びとは異なっている。

また、同時代人の家集の中では、ただ一人赤染衛門だけが雪の消えることに命の消えることを仄めかした歌を残して
いる。

正月につかさめしはじまるよ、おなじ院に、ゆきいみじうふりしにまありて、
たかちかが事けいしてまかでてまゐらせし

28 おもへただかしらのゆきをはらひつつきえぬさきにといそぐ心を (赤染衛門集 327⁴)

二句目の「頭の雪」は、文字通り頭に降りかかる雪を表して、厳しい寒さの中駆けつけた苦勞を詠い、同時に白髪を連
想させて老いた身をも思わせる。四句目「きえぬさきにと」は表では雪が消えないうちに急いで来た、と詠みながら、
老いた命が消える前に急いで来たという意を含ませる。「消える雪」は「消える命」と重ね合わされていると考えられ
る。しかし、詞書の「正月につかさめしはじまるよ」「たかちかが事けい(慶)して」といった記述から察するに、こ
れは祝意を込めて駆けつけるという意味での「急ぐ心」を強調した表現であると考えられる。最愛の娘の死に直面して
詠まれた歌(A)や、深く愛し合った帥宮の死を思つて詠んだ歌(B)、また、独りきりの心細い病床の一夜を過ごし、
まさに死を間近に感じた上での歌(C)を詠んだ和泉の〈雪〉と比べれば、死に対する感覚は全く異なる。和泉の歌は、
はつきりと死を実感した上で詠まれたのである。

おわりに

勅撰集における冬の部の雪の歌を見ると、雪を何か別の物に見立てる詠が非常に多いことがわかる。見立ての歌は『古今集』に九首、『後撰集』に十二首、『拾遺集』に三首、『後拾遺集』に三首見出され、勅撰集冬の部の雪の歌において歌数は減少していく傾向にあるものの、必ず選出される歌であることを考えると、非常に定着した詠み方であったと言える。その中でも特に、雪を花（多くは早春の白梅）に見立てる歌が群を抜いて多い。最も顕著なのは『古今集』で、九首の見立て詠のうち七首もが、雪を花に見立てる、あるいは雪を花に見間違う、といった詠み方をされている。

枯れ木にふわりと降り積もる雪を、早春の白梅に準えることで人々は春へ思いを馳せ、心を慰めていたのではなからうか。厳しい冬の寒さを想像すれば、景物に富み、暖かく穏やかな春へ心が向かうのはごく自然なことであると考えられる。

しかし、和泉式部の雪の歌二十五首のうち、雪を花に見立てた歌はわずか二首であり、春の喜びを想うことは少ない。それは雪が解けることを詠んだ歌にも表れており、他の歌を見る限り、雪解けは気温の上昇による春の兆しと捉えられていたが、『和泉式部集』にその類の歌は残されておらず、「儂いもの」と捉えて人の命と重ね合わせたのは独特な感覚であると言える。

最愛の娘の死、深く愛し合った帥の宮の死、そして病の一夜を心細く過ごして間近に感じた己の死。直面した死への実感が、消えゆく命の象徴として〈雪〉の歌に写し出されているのである。

注

(1) 『古今和歌集』四季の部におけるそれぞれの部立て別歌数

※ 『新編国歌大観』第一巻 勅撰集編 歌集 角川書店 一九八三年二月に拠る。

春百三十五首／夏三十四首／秋百四十五首／冬二十九首

(2) 【付記】参照。

(3) 清水文雄校注『和泉式部集 和泉式部統集』岩波書店 一九八三年五月「解説」に拠る。

(4) 『新編国歌大観』表記では二句目「かたののゆき」とあったが、『赤染衛門集全釈』【付記】参照により「かしらのゆき」に改めた。

【付記】

※1 本論で用いる歌は、次の文献に拠る。

※2 歌を検出するにあたっては、CD-ROM版『国歌大観』の語彙検索を用いた。

■1 『和泉式部集』（表記：和泉式部集（正集・統集を含む））

本稿で扱う和泉式部歌は、表記・歌番号共に全て清水文雄校注『和泉式部集 和泉式部統集』に拠るものとする。尚、考察で対象とする和泉式部歌の解釈には、岩波文庫本と、左の『全釈』を参照した。

清水文雄校注『和泉式部集 和泉式部統集』岩波書店 一九八三年五月

底本／第一類 榊原家藏忠次文庫旧蔵本和泉式部集 上下

第二類 榊原家藏忠次文庫旧蔵本和泉式部集 統集

佐伯梅友・村上治・小松登美著『和泉式部集全釈』東宝書房 一九五九年六月

佐伯梅友・村上治・小松登美著『和泉式部集全釈―統集篇―』笠間書院 一九七七年十月

■2 勅撰集 『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』

(表記：古今集／後撰集／拾遺集／後拾遺集)

三代目の勅撰集である拾遺和歌集の成立は一〇〇五年頃と考えられており、和泉式部の生没年を九八七年頃～一〇三〇年頃と仮定する(久保木寿子『実存を見つめる 和泉式部』新典社 二〇〇〇年五月「和泉式部略年譜」に拠る)と、和泉の生存中に編纂された勅撰集は拾遺集のみであり、なんらかの機会に参照し、影響を受けた可能性が考えられるのはそれまでの三代の勅撰集であることから選出した。四代目の後拾遺和歌集の成立年は一〇八六年と言われており、和泉が世を去ってから既に久しいが、この歌集には和泉の歌が最も多く採られており、また同時代人の詠歌も多く採られているという理由から、和泉式部在世中の歌人の詠歌傾向を知る上で有効であると考え、比較に用いる歌集として選んだ。

勅撰集の歌番号は全て『新編国歌大観』角川書店 に拠る。

歌の表記については、国歌大観を参照しつつ、以下の文献を参考にして、適宜漢字に改めた。また、歌の解釈に関しても概ね以下の文献に拠っている。

- ・古今和歌集 ……小島憲之・新井栄蔵校注『新日本古典文学大系5 古今和歌集』岩波書店 一九八九年二月
- ・後撰和歌集 ……片桐洋一校注『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』岩波書店 一九九〇年四月
- ・拾遺和歌集 ……小町谷照彦校注『新日本古典文学大系7 拾遺和歌集』岩波書店 一九九〇年一月
- ・後拾遺和歌集…久保田淳・平田喜信校注『新日本古典文学大系8 後拾遺和歌集』岩波書店 一九九四年四月

■ 3 『古今和歌六帖』(表記：六帖)

古今和歌六帖は「作歌の手引書を意図したもの」(『新編国歌大観 第二巻 私撰集編 歌集』巻末の「4 古今和歌六帖」項より引用)と言われていることから、当時の歌人らが目を通した可能性が高く、それ故に参考にすることも多かったのではないかと考えられることから選出した。

歌番号、表記共に『新編国歌大観』に拠る。

■ 4 私家集 『好忠集』 『重之女集』 『赤染衛門集』 『相模集』

(表記：好忠集／重之女集／赤染衛門集／相模集)

ほぼ同時代人である四歌人のうち、曾禰好忠・重之女に関しては和泉式部歌との類似性、影響力等が言われており(武田早苗「日本の作家100人 和泉式部―人と文学」勉誠出版 二〇〇六年七月「第一章 雅致女から和泉式部へ 第二節 歌学びの方法」より)、赤染衛門・相模に関しては和泉式部集に贈答歌が見られることから、よく関わり合いがあり、それ故相互に影響を受けることもあったのではないかと推測するところから、比較に用いる歌集として選出した。

歌番号は全て『新編国歌大観』角川書店 に拠る。

歌の表記については、国歌大観を参照しつつ、以下の文献を参考にして、適宜漢字に改めた。また、歌の解釈に関しても概ね以下の文献に拠っている。

- ・好忠集：松本真奈美・高橋由記・竹鼻績著『和歌文学大系54 中古歌仙集(一)』明治書院 二〇〇四年十月
- ・重之女集：目加田さくを著『源重之集・子の僧の集・重之女集全釈 私家集全釈叢書4』風間書房 一九八八年九月
- ・赤染衛門集：関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子著『赤染衛門集全釈 私家集全釈叢書1』風間書房 一九八六年九月

・相模集：武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ著『相模集全釈 私家集全釈叢書12』風間書房 一九九九年十二月